

近世期音韻史文献基礎研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-08-10 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00051872

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



近世期音韻史文献基礎研究

課題番号18520352

平成18年度～平成19年度科学研究費補助金
基盤研究(C)研究成果報告書

平成21年2月

金沢大学附属図書館



1300-05147-7

研究代表者 高山知明
金沢大学文学部准教授

当該科学研究費補助金交付概要

研究課題名・課題番号

近世期音韻史文献基礎研究・18520352

平成18年度(2006年度)～平成19年度(2007年度)

基盤研究(C)

研究組織

研究代表者 高山知明(金沢大学人間社会研究域准教授)

(研究者上記1名による実施)

交付決定額

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	400,000	0	400,000
平成19年度	300,000	90,000	390,000
総計	700,000	90,000	790,000

研究公表記録

(1) 雑誌論文（現在公表が決定しているもの）

高山知明（単著），破擦音化と母音体系，『実験音声学と一般言語学 城生佰太郎博士還暦記念論文集』東京堂，218-229頁．2006年8月．

高山知明（単著），タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質，『金沢大学国語国文』第34号，2009年3月末刊行予定

(2) 口頭発表・講演

高山知明（単独），連濁と漢語の語彙的位置について，Journée d'étude internationale 'Aspects Linguistiques des Kango' 国際研究学会「漢語の言語学」，主催：Equipe de recherche en syntaxe et sémantique à Bordeaux, 2007年5月12日，於 ボルドー大学国際会館 Maison Internationale, Université Michel de Montaigne-Bordeaux 3, ボルドー．

高山知明（単独），漢語の形態音韻論と和語、外来語，Linguistique des *kango* (lexique sino-japonais), Colloque international de linguistique japonaise 日本語研究国際学会パリ大会「漢語の言語学」，主催：GREJA（パリ7日本語研究グループ），CEJ-INALCO（東洋言語文化研究所・日本研究センター），CRLAO-CNRS（東アジア言語研究センター），運営：CELIJA（Cercle de linguistique japonaise），2008年3月15日，於 パリ・ディドロ大学（パリ7）Grand Moulins 479C, パリ．

高山知明（単独），日本語の破擦音化の音韻論的特性について，韓日言語史学会学術発表会，主催：韓国日本語学会・韓日言語史学会，2008年9月6日，於 誠信女子大学校 水晶館206号，ソウル。

高山知明（単独），日本語の破擦音化の音韻論的特質—個別言語史の視点—，第4回熱海音韻論フェスタ，主催：関西音韻論研究会，東京音韻論研究会，2009年2月19日-20日（当該講演は二日目に実施），於 KKR ホテル熱海，熱海市。

はじめに

本書は、当該科学研究費補助金の交付を受けて行なった研究の成果内容を記したものである。

筆者は、本課題に関連して実施した研究は、最終的には雑誌論文や刊行図書として、広く世に問うことのできるかたちを取って公表すべきものと考えている。しかしながら、この時点において、まだ雑誌論文、あるいは刊行図書として公表が実現していない内容も残っている。そこで、本書ではそうした点もできるだけ盛り込むようにした。また、雑誌論文で公表の主題についても、本書ではそれとは異なる独自の版を作成して示した。

今回の交付によって、様々な面において研究を発展させることができた。この場を借りて関係各方面に厚く感謝申し上げたい。それに応えるためにも、今後、本成果の内容をさらに洗練したうえで雑誌論文や刊行図書などの媒体を通して公表していく予定である。

諸々の事情により、成果報告書の刊行が予定よりも遅れたことをお詫び申し上げます。遅延の期間中も、本課題の成果を講演などで公表する機会が与えられた。そのため、本書の作成作業を進める間にも随時、最新の補正をできるだけ施すように努めた。

2009年2月

目次

当該科学研究費補助金交付概要	2
はじめに	5
目次	7
1. 中世から近世にかけての音変化と五十音図.....	9
1.1. はじめに.....	9
1.2. 五十音図と現実とのズレ.....	10
1.3. 謡曲関係の文献における五十音図.....	11
1.4. 言語変化に対する意識の醸成.....	19
2. タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質について.....	21
2.1. はじめに.....	21
2.2. タ行ダ行の破擦音化.....	21
2.3. 従来の研究の問題点.....	23
2.4. 問題の提起.....	26
2.5. 日本語におけるその他の「破擦音」.....	26
2.6. タ行ダ行破擦音化の特質.....	26
2.7. タ行ダ行破擦音化の音声条件.....	27
2.8. タ行ダ行破擦音化とサ行ザ行の子音.....	30
2.9. タ行ダ行における破擦音の発生.....	31
2.10. 摩擦による区別の拡張化—音韻論的現象としての破擦音化.....	33

2. 11.	タ行ダ行破擦音化後にできた下位体系	35
2. 12.	「四つ仮名」	35
2. 13.	セ, ゼとの関係	38
2. 14.	破擦音化の遅速の問題	39
2. 15.	母音体系と破擦音化	41
2. 16.	破擦音化の類型論	41
2. 17.	現代語における口蓋的対非口蓋的の「対立」	43
2. 18.	破擦音化に関する課題	46
	参考文献	47
3.	日本語における前鼻子音の概念規定について	49
4.	個別言語の音韻史が持つ意義（梗概）	53
4. 1.	はじめに	53
4. 2.	言語変化に対する二つの接近の仕方	53
4. 3.	言語変化の複雑性	54
4. 4.	「変容する現象」としてのタ行・ダ行破擦音化	54
4. 5.	異なる変化の相互干渉：「四つ仮名合流」と「濁音の脱前鼻音化」 ...	57
4.5.1.	濁音の脱前鼻音化	57
4.5.2.	第一の干渉	57
4.5.3.	第二の干渉	58
4. 6.	撥音の次にくるザ行音	59
4. 7.	まとめ	62
	参考文献	63

1. 中世から近世にかけての音変化と五十音図

1.1. はじめに

中世から近世にかけての時期は、日本語の音韻史研究にとって興味深い時期である。

いま、京都を中心とする中央語に限定して見てみると、まず母音に関しては、この時期、開音と合音とが合一し、その結果としていわゆるオ段長音が形成され、日本語の母音組織の中に長短の対立が顕在化するようになった。

他方、子音に関しても次のような変化が生じている。まず、チ・ツ、ヂ・ヅに破擦音化が生じ、ヂ・ヅはさらに各々、ジ・ズに合流した。この変化によって、それまでの清音と濁音との均斉的關係が崩れた。その代わりに、チ・ツは、シ・ス、ジ・ズとともに摩擦要素を持つ組の一員となり、日本語の音韻体系の中に新しいしくみが生まれている(これについては第2章で述べる)。

また、これに加え、ハ行子音に脱唇音化の傾向が現れるようになった。すなわち、ハ行子音は唇 labial という特定の調音点を失うとともに、後続母音の口つきと基本的に変わらないという、他の子音にはない独特の実現を有する音に変容していったと推定される。ハ行子音は、すでに母音間での接近音化によって11世紀以降、事実上語頭だけにその分布が限られるようになっていた。そして、語頭位置に残されたハ行子音は、徐々に、おそらく現代語と同じく、無声化母音といってよい音声で実現されるようになっていった。

以上のように、これらの変化は、日本語の音の仕組みの変遷という観点から見て、いずれも興味深い現象である。例えば、ハ行子音における脱唇音化 $p > \phi > h$ の過程は、同様の傾向が諸言語の音変化においてもしばしば見られるため、日本語の例もその一つとして数えられることがあるが、個別言語的

観点から考えるべき問題も存在する。ハ行子音の出現位置は、平安時代に生じた母音間の接近音化（いわゆるハ行転呼音）によって語頭に限られるようになったが、h への変化はその位置的な偏りを反映するものであろう。しかし、h への変化が、平安時代以降、かなり時間を隔ててから生じていることは、日本語が持つ個別言語に関する歴史的な文脈、日本語の体系内に占めるハ行子音の位置に関する諸点を抜きに考察することはできない。

こうした問題のほかにも、日本語音韻史にとっては、この時期に関しては、さらに面白い研究課題を提起してくれる。具体的にそれがどのような問題であるかについて次節に述べる。

1.2. 五十音図と現実とのズレ

上述の変化によって生じた事態として、我々は次の側面に目を向ける必要がある。すなわち、これらの変化の結果として、五十音図（以下に述べるような、この時期に音図が果たした役割に注目し、この呼称を使う）に依るのみでは日本語の音を理解するのが難しい、そのような箇所が複数生じたことである。当時、五十音図は、自らのことばの音について省みる際の拠り所となっており、知識人たちにとって、日本語音の規矩としての役割を担っていた。つまり、反省的に母語を捉える際の枠組みを提供していたといえることができる。具体的には、よく知られた『蜷縮涼鼓集』は、その主張の根拠を五十音図に置いている。

しかしながら、現実の日本語はその枠組みからはみ出す方向にすでに変化を起こしていた。前節で述べた変化はいずれもその具体例である。

より詳しく言うと、例えば、長母音は、五十音図上では通行の各行（事実上、単母音に該当する）に対等に並置させるかたちでは位置付けることができない。なぜなら、五十音図は、仮名でどのように綴られるかという観点か

らは完全に自由な立場に立って日本語音を眺めることが、その構成が持つ伝統の制約上、できないからである。

開音にしても合音にしても、「あう」「えう」のように綴られるとすると、仮名の一字一字の読みとは素直な一対一の対応を持たない。こうした綴りと発音との関係を把握するためには、むしろ、その綴りを一まとまりとして捉えた上で包括的な整理を施す必要がある。そのような手順を踏むことなしには、これらを、そのまま五十音図にはめ込んでみても、その関係を総合的に示すことはできない。五十音図そのものが仮名の表でもある限り、仮名の束縛から完全に自由な立場から音組織を描くことは困難であるし、そうすることの意義も見いだしにくい。

また、いわゆる四つ仮名の合流の結果、清濁間に見られた完璧な平行性は失われてしまうわけであるから、音図の枠組みにも欠落が生じることになる。五十音図に基づけば当然ながら清音と濁音との間に均斉的關係が期待されるにもかかわらず、実際には両者の対称性が崩れてしまう。当然、五十音図の秩序からすれば、いびつなものと映るであろう。

ハ行子音についても、音図の中では伝統的に「唇音」とされており、そのままでは実体との間に矛盾が生じている。それゆえ、当時の人々は、言語音を反省的に捉える場合に、そうした事態と正面から向き合わざるを得なくなる。

現実と五十音図との齟齬に関する問題は、当時の知識人たちが日本語の音をどのように捉えようとしたのかについて考える上で、避けて通ることができない。両者の相克は、我々が当時の文献を扱う場合に重要な課題となる。

1.3. 謡曲関係の文献における五十音図

五十音図の存在は、近世初期において、それ以前に比べより広く知られる

ようになっていたようである。その流通はごく少数の特殊な人々の間に限られるという状況ではすでになくなっていた。謡曲における五十音図の役割は、それを具体的に反映するものであろう。特に謡曲の唱え方の指南書においては、五十音図がことばの音の根幹を成すものとして捉えられている。例えば、『当流謡百番開合仮名遣』（1697年刊）の巻頭には次のような「序」が掲げられている。

序

夫和歌は神代より始り
假名つかひ廣大無邊にして
限りなし 春の鳥の囀り
秋のむしの音風聲水音
皆あかさたなはまやらわ
の縦横の五十字に洩る事
なし 浩々然として学得
事かたかるへし 予少かり
し時より古人の糟醜を
甘んし以寸心の大海の一滴
をしり管を天にうかかひて
あきらかなるを見 九牛か
一毛とかや 故偶書林に謡
百番の開合假名つかひ
鏡梓畢

南海漁夫（池上幽雪の印）

(一) 各行の改行は原文の改行位置に従う。

(二) 「糟醜」の「醜」字は、原文では「酉」と「離」とを組み合わせた字体。この部分は、著者が自らを「南海漁夫」と名乗るところからもわかるように、「楚辞」の「漁父」にあやかった語句を使っている。

一読した印象としては、常套句を用いた形式的な言い回しに終始しているよ

うに思われる。けれども、これを本篇部分に照らし合わせてみると、形式面のみならず内容面においてもその序として巻頭に置かれるべき内容であることがわかる。その意味において、空疎な文言を書き連ねたものとは必ずしも言えない。

特に注目されるのは、「(万物の音は) 皆あかさたなはまやらわの縦横の五十字に洩る事なし 浩々然として学得事かたかるへし」の部分である。

万物の音はすべて五十字（すなわち五十音図を念頭に置いた言い方）に尽くされるとする認識は、きわめて素朴なものである。その言語観は面白い問題を含んでいるが、ここでは、そうした類の問題を論じることはせず、この内容が序以降の本篇部分とどのように関わりを持っているかという点に絞って見てみる。そうすると、編者の言わんとするところは次のように理解される。

すなわち、「五十字」（五十音図上の各仮名）によって書き記された謡曲を実際に唱えるとなると、簡単なものではなく、十分な心得なしにはうまく達成できない、言い換えれば、その発音の仕方（「開合仮名遣い」と同義）に注意を払うべき点が多々ある、そして、この書の意義は、まさに、その心得の詳細を示すところにある、ということである。

本篇部分では、以下に示すように、各曲中に現れる注意すべき語句を掲げ、それぞれについて、その唱え方（発音、すなわち「開合仮名遣い」）の要点を列挙していく。「序」はこうした内容に対して付されたものである。

高砂

抑是は 九州	きうとわり しうとわる
都を 見す	すの字 和にあつかふ
上り 候	さふらうと ひらく

存	そんし	しの字	いといふ心に和に
都	路	ちとつめる	
今日		けふと	すほる
音信		おとつ	つの字つめる
事問		とふと	すほる

(五丁表, 以下略)

つまり、「浩々然として学得事かたかるへし」というのは必ずしも抽象的な意味ばかりではなく、具体的な語句の「開合仮名遣い」(すなわち、語句の唱え方)の難しさを強調し、その奥深さを修辞を施して述べたものであろう。序のこの個所は、一見して、五十音図に深遠な奥義があるとしていることは間違いないが、そのような観念的な意味に重ね合わせて、具体的な語句の「開合仮名遣い」という実際上の存在意義をも念頭に置いていると見られる。

具体的にそのことを確認していくことにする。

先掲の「序」(序一)の後には、漢文による「門人」の跋文があり(序二)、さらに、その次に五十音図が掲げられている。

蓋聞言之所不能尽而発於容
 嗟咏歎之餘者必有自然之音響
 節簇而不能已焉也夫神代之昔
 者音節雖為自然澆季之今者響
 簇無不淫傷唯以歌謡略雖改
 之然是亦茫洋而得者稀也于愛大
 江南岸有池上幽雪先生自志学
 至耳順苟且必諷之須臾必味之
 終熟得開合呂律之妙術因茲集
 万家之秘撮枢纽之密欲近教
 弟子遠便後世而百番隱微以逐
 一選述而編得三帙矣嗚呼学諷
 謡者必由是学焉則其功不可勝
 計哉于時元禄丁丑仲秋良辰門人
 野坂氏謹跋

序二

わ	開	ら	開	や	開	ま	開	は	開	な	開	た	開	さ	開	か	開	あ	開
る	中	り	中	い	中	み	中	ひ	中	に	中	ち	中	し	中	き	中	い	中
う	中	る	中	ゆ	中	む	中	ふ	中	ぬ	中	つ	中	す	中	く	中	う	中
え	中	れ	中	ゑ	中	め	中	へ	中	ね	中	て	中	せ	中	け	中	ゑ	中
を	合	ろ	合	よ	合	も	合	ほ	合	の	合	と	合	そ	合	こ	合	お	合
												此 上 中 之 三 字 詰		此 上 五 字 和 あ っ か ぶ					

- (一)「たちつてと」の「此上中之三字詰」とは、もちろん、四つ仮名の発音を言っている。要するに「濁る〈ちつて〉」は「詰める」と指示する。なお、「て」が入っているのは「でう」と記される類を指す。
- (二)ワ行の「を」とア行の「お」は原文のまま。その他の仮名も原文どおり。

各曲の語句の具体的な「開合仮名遣い」を提示する前に、まず最初に上のような五十音図を配置する。そのことの実際意味は以下のとおりである。

日常の発音と、謡で要求される発音とにズレがあるからこそ、こうした書が出板されるわけであるが、個々の具体的な語句の唱え方をたんに羅列的に示すばかりではなく、それら全体をどのようにわかりやすく整理するか、という点において、五十音図はその要求に応える道具と成り得た。たとえば「開合仮名遣い」のどこが問題になるのかは、五十音図をもとにすれば、「いろは」に比べて格段に明快に示すことができる。

例えば、「オ段長音の開合」について言えば、開音に関わる部分がどういったところであるかを理解するためには、五十音図中のア段に注目すればよい。そうすれば、仮名の綴りと発音との関係は単純化して整理することが可

能になる。「仮名遣い」に習熟する上では、「五十音図」に基づいた整理の仕方が頭の中に入っているのと入っていないのとでは大きな差が出るはずである。

このことは、「四つ仮名」の場合についても同様である。「サ行」と「タ行」との関係を図の中に入れ、その上でどの段が関わるのかを「五十音図」中に示せばよいし、個々の語句に出会った場合も、あらかじめ「五十音図」に基づく理解が頭の中に入っていれば、「仮名」と「発音」との関係は割合整然と理解することができる。「いろは」だけしか持ち合わせていないと、全体の見通しが望めない。

もちろん、細かく見れば、「オ段長音の開合」と「四つ仮名」の場合とでは事情は異なる。

後者では、日常の発音ですでに区別されていない「し」と「ち」の濁り、「す」と「つ」の濁りについて、それぞれの仮名を五十音図上の中に位置づけて理解することによって、行と発音との関係をよりたやすく把握することができ、それによって「本来あるべき位置」が明確にされる。これを通して、正しい唱え方を理屈に従って知ることができるようになる。また、その説明を行う上でも五十音図があるのとないのとではずいぶん違うはずである。音図があればその説明は相当に容易になる。これに対し、「オ段長音の開合」では、仮名の一字一字の発音のままでは正しい唱え方にならない。しかし、この場合についても、上に述べたように、五十音図を使って、その図中の段に注目することによって、仮名と発音との関係を単純化して理解することができるようになる。むしろ、その関係を説明する側にとっても五十音図はたいへん便利である。

以上のように、巻頭に五十音図が配置されていることは、個々の唱え方を理解する上での実際的な意義を有していたと考えられる。このことは、五十

音図の受容という問題にとって注目しておく必要がある。

この文献に見える五十音図の役割は、さらに、これに続く、18世紀以降の『音曲玉淵集』、『謳曲英華抄』になるともっと明確に顕現する。

これらにおいても、五十音図が掲げられているが、その役割はもっと重要なものになっている。具体的な語句の唱え方は、曲ごとに個々の語句を列挙することによって示すのではなく、問題となる事項ごとに語句が集約され、各事項により細かな説明を付すことによって提示されている。全体がより組織化された形に再編されている。そして、それぞれの事項の説明は、明らかに五十音図に依拠したものになっており、当然、読む側も五十音図を前提にしてそれらを理解することが期待されている。要するに、構成上、五十音図が各項目の内容の土台になっている。

そのことは、以下に抜き出したような、それぞれの事項の具体例を通してみるとわかりやすい。

○いきしちにひみいりゐ江けせてねへめ江れゑより移るあ文字はあ

トヤトノ間に唱ふ

安最愛（サイアイ） 船行逢（イキアヒ） 舟思案（シアン）

八打合（ウチアヒ） 景似合（ニアハ） わぬ

（以下略）

各例の最初の小字は、その語句が出てくる曲名を示している。

このようにして曲ごとではなく、事項ごとに用例が再編され

ている。なお、（ ）は原文では、それぞれの漢字の右側にふ

りがなとして付されている。以下同。

○はひふへほの仮名は柔（やはら）かに唇を合（あはせ）て後開くな

り 初より唇を開きて唱へず（以下略）

○はね字の下のはひふへほは皆半濁に唱ふ

忠魂魄（コンパク） 輪玄賓（ケンピン） 暮春風（シュンプウ）

鶴仁平（ニンペイ） 雲根本（コンボン）

○さしすせそ ざじずぜぞへ移るはね字は舌をひかへてイトむトノ
間に刎べし

電満参（マンサン） 七親子（シンシ） 桜澗水（カンスイ）

俊寒蟬（カンセン） 歌親疎（シンソ）

笑南山（ナンザン） 半源氏（ケンジ） 舎沈水（ジンズイ）

阿神前（シンゼン） 大江眷属（ケンゾク）

このように見てくると、五十音図は以上の文献において、語句の唱え方を理解するに当たって必要不可欠なものになっている。

音変化の結果生じた五十音図とのズレは、当時の話者にとって見れば、五十音図を座標とすることによって、より明快に理解することができるものであった。そもそもズレがなければ、五十音図を必要としない。五十音図がより頻繁に引き合いに出されるようになったのは、他ならぬ背景として、それが現実の発音とずれていた点に求めることができる。つまり、そのズレが意識されればされるほど、五十音図の存在意義がかえって高まったと考えられる。

また、音図の歴史という問題に則して言えば、その一般化、普及という点に関して、当時、五十音図は身近とまでは言えないまでも、上に指摘したような用途に使う社会性を持ち得ていたことは注目してよい。少なくとも謡曲を嗜む類の人々にとっては、受容可能な存在であった。

1.4. 言語変化に対する意識の醸成

五十音図を規矩として、それをもとに仮名と発音との関係を整理すると、現実の言語状況とのズレについてあれこれ考えざるを得なくなる。言い換えれば、現実の側からの刺激によって、五十音図に基づく日本語認識がさらに露わになる。

前節で見たような、五十音図の使い方は、おそらく、当時の、言語変化に対する認識の深まりと無関係ではありえない。もちろん、謡における唱え方を、そのまま一般のことば遣いにおける規範ないし理想的な発音と同一視してよいかどうかとなると、慎重に考える必要がある。しかし、『蜷縮涼鼓集』〔元禄8(1695)年刊、著者不詳〕についていえば、こうした文化的文脈の中においてはじめて、その成立の背景がよりよく理解できるのではないだろうか。つまり、『蜷縮』は、現実の日本語と五十音図に基づく理解との間のズレを埋めようとする試みをこの時代にあって展開したものである。その結果が、サ行、ザ行に対するタ行、ダ行の発音に対する精緻な考察を生んでいる。そう考えると、彼の見解も、時代から突出して現れ出たものでは決してない。

言語学のような学問分野がそれなりの位置を与えられている今日と違い、過去においては、目の前の、ある言語変化を取り上げ、それについて論じる書物が世に出ることは稀である。そのような文献の存在はふつう、そう期待できるものではない。その点で『蜷縮涼鼓集』は例外的であると見られてきた。それに加えて、この書の著者が説く発音法は、抽象的な概念操作に依ることなく、舌をはじめとする音声器官の動きを具体的かつ明示的に示しているため、今日の調音音声学の立場から見ても精確であるかの印象を我々に与える。それゆえ、この著者は鋭敏な言語観察力を持つ、たぐいまれな人物として高く評価され、そして、この書も、異彩を放つ内容を有し、音韻史のみ

ならず国語学史の重要な資料とも位置付けられている。

しかし、言語史資料としての評価に、過度に人物論的視点を持ち込むことには慎重でなければならない。この書がそれなりに個性的な内容を有する点は否めないとしても、我々はその具体的な内容を分析する場合に、一個人の異才ぶりにのみ目を奪われないように心がける必要がある。

言語史研究の立場からすれば、我々が知りたいことの本質は、この著者の特異性ではなく、その著者を生んだ当時の言語感覚がいかなるものであるのかという点にある。すなわち、その時期の同時代的背景に目を向けることのほうがより重要である。

これまでのこの文献に対する評価はともすれば、「四つ仮名」の変化（いわゆるその「混同」）の状況を知る上で、異色の筆者がいてくれるおかげで、たいへん役に立つ、というような認識が支配的ではなかったかと思われる。

今も述べたように、大切なのは、この著者の、言語現象に対する目の向け方に、当代に特徴的な視点の持ちよう（バイアス）が反映されていないかどうかを探ることである。すなわち、いわば、その「眼鏡」に注目することが求められる。著者が鋭い感性を持っていたこと自体を否定するものではないが、それにのみ目を奪われてしまつては、重要な問題が見逃されてしまう。人物論への無反省な指向は本来、慎むべきであろう。『蜷縮涼鼓集』の特異な「個性」を音韻史研究において過大に評価することに対しては警告もなされてはいる。ただし、より重要なのは、その問題性が具体的にいかなるものであるかを掘り下げることである。謡曲との関わりは、これまでも指摘されているが、この筆者が謡曲を嗜んだという以上に、この書の実質的な内容にも大きく反映されていると言うことができる。

2. タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質について

2.1. はじめに

チ、ツとヂ、ヅに15, 16世紀ごろ生じたとされる破擦音化は、日本語史（あるいは国語史）を扱った概説書においては必ずと言ってよいほど触れられているが、それにもかかわらず、以下に述べるような理由から、これについて論じた先行研究が少なく、あまり注目されてこなかったというのが実情である。しかし、この破擦音化はその変化の仕方からして興味深い点を有している。とくに、この現象の音韻論的側面に光を当てると歴史的事象としての輪郭がよりはっきりと見えてくる。タ行ダ行の破擦音化の問題は、近世期にかけて生じた音変化の理解を深める意味においても重要であるので、ここで論じることとする。

ところで、論に先だち、予め断っておかなければならないことがある。

破擦音の出現の仕方、あるいは破擦音化の生じ方に関しては、方言によって大きく異なったのではないかと疑いが濃厚である（この点は高山知明2006で論じた）。そのため、以下の考察は当面、京都を中心とするいわゆる中央方言を対象を限定する。

2.2. タ行ダ行の破擦音化

まず、どのような現象であるのかその概略を示しておこう。破擦音化が生じたのは、下記のうち、タ行子音、ダ行子音に母音 i, u および拗音要素 j が後続する場合である。

ta	<u>ti</u>	<u>tu</u>	te	to	<u>tja</u>	<u>tju</u>	<u>tjo</u>
da	<u>di</u>	<u>du</u>	de	do	<u>dja</u>	<u>dju</u>	<u>djo</u>

(この時期の母音に関していえば、いわゆるオ段長音の開音、合音の違いにも表示上、考慮する必要があるが、ここでは簡略化のため示さずに済ませる)

具体的に音の実質がどう変わったかについては次のように推定されている。

チ ti > tʃi, ツ tu > tsu

ヂ di > dʒi, ヅ du > dzu

拗音の場合を省略する。

破擦音化以前のタ行、ダ行の子音の音価推定を支える文献上の手掛かり¹の主なものを掲げるとすると、いわゆる朝鮮資料の一つである弘治五年刊『伊呂波』朝鮮刊(1492)がある。その冒頭の「いろはうた」に付されたハンゲルによる音訳によれば、「ち」に対しては‘ㄷ’が、「つ」に対しては‘ㅈ’が用いられており、これは、当時の日本語においてチツヂヅがまだ完全には破擦音に変化し遂げていなかったことを示すものと考えられている。

これよりさらに以前の、上代における万葉仮名(音仮名)について見れば、東歌のような例外を除くと、タ行ダ行に該当する漢字音の声母は、もっぱら中古漢語の舌音(破裂音と推定)に属しており、歯音字は用いられていない(「歯音」の範疇には破擦音が含まれる)。少なくとも近畿方言に関する限り、文献時代以降16世紀に至るまで、タ行ダ行は、タテトダデドのみならずチツ

¹ これに関する先行研究は重要であるが、ここではその一つ一つを掲げずに済ませる。

ヂヅに関しても、破裂音と母音の組み合わせから成っていたと推定される。

他方において、構造上の手掛かりがこれを支えており、子音 t が母音 i, u の前で分布を欠く構造よりは、一律にすべての母音の前に t が現れる構造のほうが均整性の観点からいって無理がないといえることができる。例えば、動詞「焚く」が *taka~taku~taki* のような末尾の母音の交替によって、その形態論上の働きを換えているとすれば、やはり、「立つ」もこれと同様に末尾母音による交替 *tata~tatu~tati* によるものと見るのが自然である。つまり、古代語に現れる母音交替は、たとえ後世それが変化を受けて元の姿を変えることがあるにせよ、本来的には、同一子音がこれらの母音の前に等しく現れるという分布のもとに成り立つ形態法であると推定される。こうした、言語内部的な現象をもとにした考察によっても、タ行ダ行の上記の推定をより確からしいものとする事ができる。

2.3. 従来の研究の問題点

さて、上にも述べたように、この破擦音化は、概説書でも基本的事項として掲げられているにもかかわらず、それ自体を主要な考察対象として論じた先行研究が意外にも少ない。多くの場合は、四つ仮名について論じる中で、それに先行する一つ手前の現象として言及されるにとどまっている。

この変化自体の性質が注目されてこなかった理由としては、一つに、仮名の区別を揺るがすものでなかったから、ということが考えられる。もちろん、破擦音化に続く「四つ仮名」音の区別消失は—まさにその「四つ仮名」という名称自体が示すように—仮名遣いの混乱を引き起こすわけであるが、これに対して、破擦音化自体は仮名の遣い方には影響を及ぼさない。

そのためか、これまで、音変化として見ても、「四つ仮名の混同」²に比べ、

² 従来、音変化を指す場合にも「四つ仮名の混同」という名称が一般的であ

「国語史」のうえでさほど重要でない事象であると、何となく見なされてきたのではないだろうか。そうした疑いは否定できないように思われる。

しかし、音韻史の問題が文字のあり方と深く関わることは否定できないにせよ、当該の音変化それ自体の性質を探るためには、文字の問題とは切り離して、それをとらえようとする姿勢をあえて取ることが求められる。たとえ、音変化の兆しが文字上に現れることによって我々は考察の手掛かりを得ることができるとしても、この点と、音韻史が独自に目指す対象とは峻別してかからなければならない。音韻史の独自の問題としての、個々の音変化に対する評価を行う場合には、現象を見る目に、文字上の観点が不用意に入り込んで先入観となっていないかどうか、むしろ警戒する必要さえある。ともすれば、これまで破擦音化の問題に関してはその点が必ずしも十分でなかったのではなかろうか。

もちろん、音変化の類型という、文字の問題と切り離れた立場からいっても、この破擦音化に注意が向けられてこなかった理由がないわけではない。すなわち、一見したところ、音韻組織を変えるような現象でないかに見えるからである。これに対し、音素的対立が合流によって失われる変化は、音韻

った。これを「混同」と捉えるのは、まさに文字上の区別を前提としている。

ひとたび、合流によって音の区別が失われれば、もはや「混同」のしようがない。つまり、一つの単位となればそこに「混同」の概念を当てはめることは無意味である。しかし、音が合流しても、文字の面においては依然として、「濁るシ」と「濁るチ」のように二つの単位は存在し続けるため、「混同」という事態が成立しうる。それゆえ、音素対立の消失を「混同」と捉える認識は、文字のフィルターを通してはじめて成り立つものである。

最近では、音変化としてのそれを指す場合には「混同」を避けて、「合流」を使うこともめずらしくない。しかし、ここで今一度、研究史を振り返る意味でも、「混同」と呼ばれ続けてきたその概念的背景を掘り下げておくことはあながち無駄でないと思われる。「四つ仮名の混同」と呼びならわされてきたことは、仮名の観点が、従来の国語音韻史に根深く影響を与えてきたことを象徴的に示している。はるか過去にその区別を失った現代語に至ってなお、「東京方言では四つ仮名を混同する」のように言い表すのは、かなり奇妙なはずであるが、にもかかわらず、研究者の多くがそれに違和感を抱くことがあまりなかった。

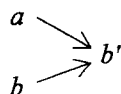
組織に関わる重大な現象ということになる。

それを図に示すとすれば次のようになる。

$$(1) \quad \begin{array}{l} a \rightarrow a' \\ b \rightarrow b' \\ c \rightarrow c \end{array}$$

(1) にくらべると (2) の変化は重大視されやすい。

(2)



a と b と合流 (音素的対立が消失)

これに従えば、タ行ダ行の破擦音化は上記の (1) に該当する。チツヂヅがその音の實質を変えている (図の $a \rightarrow a'$, $b \rightarrow b'$ がこれに当たる) のに対し、他方、タテトダデドはその實質を変えていない (図の $c \rightarrow c$ がこれに当たる), という違いがある。しかし、体系内での、これらの相対的な位置関係は変化の前後で変わらない。その意味で大きな変化ではない、と見なすわけである。これが、この破擦音化に対する従来の方の見方であろう。

これに比して、(2) はそれまで互いに区別されていた単位が区別を失う変化である。二つの単位は一つに統合され、その前後で体系そのものに変化が生じている。今問題にしている破擦音化に続いて生じた「四つ仮名」音の合流がその例である。ダ行のヂ, ツは破擦音化を経て、それぞれザ行のジ, ズに合流した。従来、破擦音化に比べて、目が向けられてきたのはこの「四つ仮名」のほうであり、先行研究の関心もそこに集中している。

2.4. 問題の提起

タ行ダ行の破擦音化は、一見したところ、音声学的な差異が生じたに過ぎず、日本語の音韻体系にとって重要な変化ではないかに見える。しかし、本当にそう言えるのか。それをあらためて問い直し、破擦音化が日本語音韻史においてどのような変化であるのかを明らかにする。

2.5. 日本語におけるその他の「破擦音」

次のような「母音の無声化」と呼ばれる音声実現も破擦音であるといわれる（下記 IPA 表示はあくまで近似的なもの）。

「くさむら（叢）」 [kx]

「きしべ（岸辺）」 [kʲç]

後述するように、これらも、歴史的現象としてのタ行ダ行の破擦音化とまったく関係がないとは考えられない。しかし、歴史的変化であるタ行ダ行の破擦音化とは異なる取り扱いが必要である。また、破擦音化が進行する前の [ti][tu] の段階で無声化が起こっていたとしても、その場合の音声実現は [tʰi][tʰu] と等価ではない。無声化によって破擦音に近づくことはあっても、依然異なるとすれば、ここでは無声化と破擦音化とを区別しておくのが適切である。

2.6. タ行ダ行破擦音化の特質

かりに破擦音化がチ、ヂだけに起こったとすると、それは後ろに続く前舌の /i/, /j/ による口蓋化 palatalisation に伴って生じたものと見ることができる。

しかし、この破擦音化はツ、ヅにも起こっているため、そのような説明によっては現象を包括的に理解することができない。日本語のこの破擦音化は、二つの狭母音（拗音要素 j を含む。以下同）の前でほぼ同時に起こっている

点できわめて面白い現象である。それだけにその背景を探ることは、たいへん興味深いといえる。要は、前と後の二つの母音という生起条件をどう考えるかである。

二点目は、体系内にあらかじめ破擦音素が存在するところに、破擦音化が生じたというわけではないことである。例えば、英語における(3)の例では、すでに音素として $tʃ$ が存在しているところに、さらに破擦音化が起こっている。日本語のタ行ダ行の破擦音化は、このようなかたちで生じたものではない。

(3) jの前での破擦音化の例(英語)

adventure $tj > tʃ$ 一語内での歴史的変化

...that you..., ...got you, $tj > tʃ$ 語連続に生じる変化

以上、これら二つの点をまとめておこう。

(あ) 二つの狭母音の前でほぼ同時に破擦音化している。

(い) タ行ダ行破擦音化以前に、体系内に破擦音素が存在していない³。

2.7. タ行ダ行破擦音化の音声条件

チツヂヅに共通する音声条件は、いずれも狭母音の前であることである。

しかし、狭母音という条件だけでただちに破擦音化が生じるとするのには無理

³ サ行子音、ザ行子音(あるいはその一部)が破擦音で実現されていたと推定されている。タ行ダ行破擦音化の段階では、サ行子音は破擦音から摩擦音に推移した後であったと考えられる。それゆえ、少なくともこの時点では、これを「破擦音素」と積極的に認めることはできない。もちろん、ザ行子音に関しては問題があるが、「摩擦音素」に対立する意味での「破擦音素」という位置にはない。

はないだろうか⁴。もちろん、形式的な処理としてはこの条件で捌くことは
いちおう可能であるが、前舌母音による口蓋化に伴って破擦音化がしばしば
起こるのに比べると、それをさらに広げ、狭母音の前という音声条件で処理
するのは、射程が漠然としていて、この条件がどのように破擦音化に結びつ
くのかという関係性を見出すのが難しい。その点でどうしても説明力に不足
がある。形式的に狭母音の前という条件を立ててみたとしても、それによっ
て、この変化に対する理解が進んだとはいえない。

しかも、チとツの二つが同じ子音/t/（あるいはヂとヅの/d/）である点につ
いても説得力のある説明が必要である。

以上のように考えると、音声学的観点からは、チヂ、ツヅのそれぞれの破
擦音化を別個に考えざるを得ない。当面、別々に、その音声の特質に関する
歴史的事実を考慮しつつ検証する必要性が生じる。

〈チヂの破擦音化〉

上に述べたように、これらでは母音/i/の前舌性によって口蓋化する条件に
ある。そのように理解すれば、調音位置を dental とする/t/ の後で、母音/i/
の硬口蓋への舌の盛り上がり、口蓋的な摩擦要素[tʃ][ʒ]の発生に関わってい
ると考えることができる（ここで用いる IPA は[e][z]との違いを問題としない。
簡略表記の習慣に従う）。

〈ツヅの破擦音化〉

朝鮮資料『倭語類解』『改修捷解新語』において、日本語ス・ツ・ズ（ヅ）の
/u/に、ㅍ, ㅃのような非円唇の字母を当てているという文献上の事実がある。

⁴ これに関しては、現代語のタ行に関する音韻論的解釈に関して論じた、服部四郎(1960)が参考にされる。この点は高山知明(2006)でも言及したので、ここでは繰り返さない。

この文字転写は破擦音の問題を考える上でたいへん示唆的である。

日本語の後舌狭母音は全体として唇の丸めが弱いといわれる。なかでも歯音の後ではその調音場所の影響を受けて、そこに接近するために後続母音の中舌化がより起こりやすい。その音色の明るさが、/u//ɯ/の二つをその母音体系に持つ朝鮮語の耳によって感知されたのであろう。その結果、日本語の音韻にとっては有意ではない違いをもハングルの文字上に反映させたものと推定される。

そして、/ɯ/の後では、この子音の調音場所である dental と、後続する母音の舌の盛り上がり位置とが近接するために、狭めがより持続し、摩擦要素が発生しやすかったと考えられる。ツヅの破擦音化はこのように考えることができる。

以上のように個々に考えると、いずれの場合も摩擦要素発生に対する説明をすることができ、これで十分のようである。

しかし、なぜ、ほぼ同時期にこれら二つの変化が生じたのかという肝心の点は置き去りにされたままになってしまう。要するに、個別に音声変化の条件を並べてみても、日本語史におけるこの変化の特質、その歴史的価値ないし出来事としての性質をつきとめることはできない。音声条件によるだけでは歴史的な出来事の解明にたどり着けない、ということである。

「二つの」破擦音化は、異なる条件に基づいて、たまたま同じ時期に起こったという可能性を排除することは原理的にできない。しかし、同時期に、他ならぬ破擦音化が起こったとすれば、一つの変化と見るのが自然である。まずはその線で考えてみるべきである。これらを包括的に説明することは安易に放棄することはできない。

2.8. タ行ダ行破擦音化とサ行ザ行の子音

上に述べたように上記朝鮮資料において、破擦音化したツではサ行のストともに、/u/に非円唇の字母を当てている。そしてズ（ヅ）もこれと同様である。中舌化の傾向は、タ行ダ行と、サ行ザ行とに顕著であったことを反映している。ス・ツ・ズ（ヅ）は、その母音が中舌的である点で一つの組を構成しており、しかも、タ行ダ行の破擦音化後は、サ行ザ行と同じ音色の摩擦要素 [s][z] を持つ点で共通するに至っている⁵。

そして、これとよく似た状態が、一方のシ・チ・ジ（ヂ）にも見られる。つまり、破擦音の後、口蓋的な音色を持つ摩擦要素 [ʃ][ʒ] を持つという共通性がこれらに生まれている。

このように考えると、破擦音化によって、タ行チ・ツと、サ行シ・スとの間に相関関係が出来上がったことがわかる。破擦音化といえ、他ならぬ摩擦要素の発生のことだから、これは至極当然のことだと思われるかもしれない。しかし、この一見当然と思われることの持つ意味について、これまで掘り下げては考えられてこなかったのではないだろうか。

ここまで述べてきたことを整理すると、この現象には以下のような二つ

⁵ これらの文献は破擦音化以後の時期に属する。それゆえ、これに基づいては、ス・ツ・ズ（ヅ）の/u/が破擦音化以前に中舌的であったことを示すわけではない。しかし、中舌化の傾向と破擦音化とが関係することは間違いないであろう。

破擦音化以前の段階を示す『伊路波』が、ツをㄷとするように、円唇の字母を当てるが、これによって、破擦音化以前のツが、/u/が相対的に見て後代より円唇的であったことになるかどうかは、どの音を以て充てるかという方針の在り方が異なることも考えられるので、慎重にならざるを得ない。

ところで、中本正智(1990)は、「日本語におけるいわゆる四つ仮名の区別の消失は、母音 u の前進推移による i と u の接近と大いに関係があると考えられる。四つ仮名の区別が u の前進推移のはげしい東北地方や琉球地方ではやくに失われ、u の前進推移のおそい西日本、とくに四国地方や九州地方で比較のおそくまで保たれている事実は、このことの一証となろう」とするが、これに対して本稿では、破擦音化のあり方、i の中舌化など具体的に問題をほぐしていく必要があると考える。

の側面があることになる。

- a. チヂとツヅ，すなわち，母音/i/と/u/とでは，破擦音化を引き起こす音声条件が異なる。
- b. チヂとツヅとに共通するのは，清濁のそれぞれがサ行，ザ行子音，すなわち，各々，シジ，スズとの間に相関関係が認められる。

このうち鍵を握るのは b. である。つまり，破擦音化とサ行，ザ行の子音との関係を探る必要がある。

2.9. タ行ダ行における破擦音の発生

タ行ダ行破擦音化が起こる前段階における，サ行のシとス（ザ行のジとズ）の区別はどうであったか。この時点でス，ズの中舌化がどの程度であったかを判断する決定的な手掛かりはないが，少なくともその母音はさほど円唇的でなかったと考えられるので，シとス，ジとズの区別は，実質的には次のようであったと想定される。

Ci 口蓋的	Cu 非口蓋的
(シ, ジ)	(ス, ズ)

この想定を支える重要な手掛かりは，キリシタン文献のローマ字綴りである。以下のような，ポルトガル語を土台とした用字法によって，子音の音色の違いが表現されている。

シ xi	:	ス su
ジ ji	:	ズ zu

後続母音の違いに応じて、口蓋的、非口蓋的の違いが生じており、それが結果的にアルファベットの字母の選択に反映されたものである。キリシタン文献は、時期的に見て破擦音化よりも後に属するが、サ行、ザ行の子音の違いに関しては、破擦音化直前の時期からキリシタン文献の時期までに何らかの変化があったと考えるのは困難である。ゆえに、これらの音色の差異は、破擦音化が起こる際にすでに存在していたと考えられる。

ところで、上記の Ci と Cu は、C（子音）それ自体で音色の違いを出すことができる。すなわち、母音に依らなくとも、その摩擦音だけで区別が容易に行える。その点を強調すると次のように示される。

Cⁱ 口蓋的（具体的には[tʃ][ʒ]） C 非口蓋的（具体的には[s][z]

これらにおける[tʃ]と[s]、[ʒ]と[z]の違いは、音韻論的解釈の観点からいえば、それぞれ後続母音/i/, /u/の環境同化によるものと解釈される。つまりこれらはたがいに異音の関係にあり、この差異は示差的でないといわれる特徴である。

しかし、その摩擦の音色の違いは一定しており、シとス、ジとズにおいては、現実には母音を弱めたり落したりしても支障がなかったと推定される。すなわち、この点について言えば、サ行、ザ行は15世紀の段階で現代語とほぼ同じ状態にあったであろう。現代語においては、いわゆる無声化と呼ばれる、実質的に母音が実現されないケースは枚挙にいとまがない（例えば、「あした」のシの音、「行きますか」のスの音）。程度の差はあれ、当時においても、同様に母音が実現されない場合があつておかしくないと考えられる⁶。

音韻論的解釈上では余剰的 redundant であっても、摩擦音の音色の差異は、

⁶ 現代近畿方言では無声化が生じにくいといわれるが、程度の違いこそあつても起こることに変わりはない。

シとス、ジとズの聞き分けに重要な手掛かりを与える特徴であったにちがいない。

さて、他方において、タ行チツ、ダ行ヂヅが破擦音で実現されるようになると、上に述べたのと同じ関係が次のように、これらにもあてはまるようになる。

Ci 口蓋的	Cu 非口蓋的
(チ, チ)	(ツ, ヅ)

つまり、ここでも同様に、後続母音の違いに応じた、口蓋的、非口蓋的の違いが摩擦要素の音色によって表出されることになる。破擦音化によって、シ対ス、ジ対ズと並行的な関係が、チ対ツ、ヂ対ヅに出来上がってくる。

C ⁱ 口蓋的 (具体的には[ʧ][ʦ])	C 非口蓋的 (具体的には[s])
----------------------------------	-------------------

また、上記の Ci と Cu とが、C (子音) それ自体の違いで識別できる点においても同様である。母音に依らなくとも、摩擦要素だけで区別が容易に行える関係がサ行、ザ行に加えて、タ行、ダ行でも成立している。

2.10. 摩擦による区別の拡張化—音韻論的現象としての破擦音化

この変化は、以上のように考えると、サ行のシス、ザ行のジズから、タ行のチツ、ダ行のヂヅへと、摩擦要素が(部分的にしる)識別に関わる方式が拡張される過程であるといえる。摩擦要素の発生によって、音節を区別する手掛かりは強化されている。

このように、サ行ザ行との並行性を考慮しつつ、また、チ対ツ、ヂ対ヅに

おける摩擦要素の音色の違いが持つ音韻論的意義に注目することによって、「二つの」破擦音化を包括的に理解することが可能になる。

タ行ダ行の破擦音化は、見かけのうえでは音声面だけの変化であり、対立の項に増減が生じない以上、音韻論的観点から論じるべき点がないように思われるかもしれない。しかし、この変化を理解するためには「対立」の視点が不可欠である。すなわち、音韻論的側面を考慮せずには捉えることのできない現象である。母音 i の前とともに u の前でも破擦音が発生したのは、単に後続母音による同化というのではなく、狭母音音節間の「対立」が変化の対象になったためであると考えられる。音節チとツ、ヂとヅにおいては、摩擦要素の恒常的な実現によって、これらを区別する子音上の手掛かりが増えている。発生した摩擦要素が、母音の音色の違いを受けて、その対立の識別において部分的にせよ重要な役割を担うようになっている。また、後舌の tu と to, du と do の違いも、片方が破擦音になることで明瞭になっている。個々の子音、母音というのではなく、音節単位の相互の区別という観点が重要である。

破擦音化は、例えば、可能性という点からいえば、口蓋化を契機にしてカ行のキにおいても起こりうる (ki>tʃi)。しかし、これと同時に ku に破擦音化が起こることを想定するのは難しい。これに比べると、タ行、ダ行の場合には、同じ歯音である点でサ行、ザ行と調音場所が共通であり、スズと同様に、ツヅにおいても母音の中舌化が起こる。その並行性ゆえに、チツ、ヂヅと、シス、ジズとの間に相関関係が形成されやすい。

先に述べたように、後続母音が i と u とでは破擦音化の音声条件を一にしない。それにもかかわらず、双方に破擦音化が生じたとすれば、このような関係性を無視して考えることはできない。

2.11. タ行ダ行破擦音化後にできた下位体系

変化の結果として、チツがタテトとは別に、また、ヂヅがダデドとは別に、それぞれが対を構成するようになる。新しく、摩擦要素の音色の違いで区別される、チ対ツ、ヂ対ヅの二対の成立である。そして、それらは、サ行のシ対ス、ザ行のジ対ズと並行的な関係にあり、全体として音韻体系の中に新しい下位体系が出来上がっている。

口蓋的	非口蓋的
ʃ	s
tʃ	ts
ʒ	z
(dʒ	dz)

音韻論的解釈としては、口蓋的か非口蓋的かの違いは、現代語においても環境同化による相補分布として処理可能であり、余剰的な特徴として解釈するのが普通である。

しかし、少なくとも、狭母音の音節（シとス、チとツ等）を区別する上で、摩擦の音色が果たす役割は軽視することができない。破擦音化によって摩擦要素が挿入されることによって、子音の違いの重要性はより高まる方向に、つまり、区別の負担を子音の側に傾斜させる方向に変わっている。すなわち、摩擦音ないし摩擦要素が識別により大きな役割を果たす、下位体系の確立である。

2.12. 「四つ仮名」

比喩的な言い方をすれば、ヂとヅは、破擦音化によって自らの音節の中に

摩擦要素を取り込むとともに、さらに進んで、もともと摩擦要素を持つジ、ズと一体化するという経過をたどった。これが、いわゆる「四つ仮名」の合流である。このように、近畿中央方言では、ジとヂ、ズとヅでは、摩擦と破擦の対立を放棄する方向をとった⁷。

従来、日本語音韻史においては、「四つ仮名」に焦点が当てられるのに比べると、「破擦音化」はそれを導いた先行の現象として、いわば副次的な位置が与えられてきたに過ぎない印象がある。しかし、前節で述べたように、「破擦音化」をチ対ツ、ヂ対ヅという対（つい）の成立と考えると、「四つ仮名」に対する見方もこれに応じたものに変える必要がある。

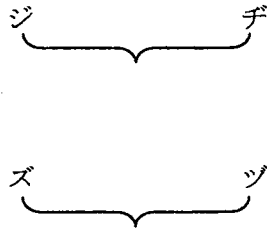
「四つ仮名」合流を、破擦音化の過程の一部と見なし、その最終局面として、これを位置づける見方はそれほど目新しいものではなかろう。むしろ、暗にそのような見方を取る研究者は今日、むしろ少くないと思われる。

しかしながら、あらためて、破擦音化について上のように考えてくると、それとの関わりにおいて、「四つ仮名」に関する従来の見方に対しても反省を加えておく必要がある。

ともすれば、これまで、「四つ仮名」対立の消失は、その「四つ仮名」という名称も手伝って、「四つ」であることに力点が置かれてきたきらいがある。具体的にいうと、以下のような見方がわりあい一般的だったのではなかろうか。

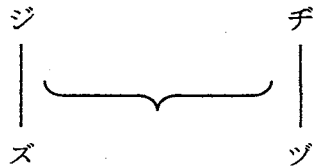
すなわち、ジとヂ、ズとヅのそれぞれの組が区別を失うという理解の仕方である。言い換えれば、項と項との合流が、二組生じたとするものである。

⁷ 本論は、各地の方言について包括的に論じるものではない。最初に述べた通り、近畿方言に限定している。鹿児島方言については（杉村孝夫2001など）を参照。



しかし、上に述べてきたように、破擦音化によって、チツがタテトと袂を分かち、ヂヅがダデドと袂を分かち、あらたに摩擦要素の音色でも区別される対(つい)、すなわちチ対ツ、ヂ対ヅが出来上がったと見る立場からすれば、単に項と項との合流が二組起こったとするだけでは正確ではない。

前節に述べた下位体系の観点からいえば、「四つ仮名」の合流は、二組の、項と項との合流として個々に捉えるのではなく、次に示す図のように、口蓋的対非口蓋的の、二つの対(つい)が一本化する変化と見たほうがよい。つまり、対と対との合流である。



さて、現在、ザ行は全体として(つまりザジズゼゾすべてに関して)、摩擦音と破擦音の両方の実現(厳密にはその連続帯の実現)を持っているが、このような状態はいつごろから見られるのかという点は十分に明らかでない。ひとつの考え方は、「四つ仮名」合流の完了後にこのような状態が出来上がったとするものである。これに対して、その前より破擦音が(今日とまったく

同様の分布を示すか否かは別としても) 存在したかもしれないとする想定もなされている。

後者の想定によれば、ザ行子音の変異 variants にもともと破擦音が含まれており、ザ行全体が摩擦音への完全な推移変化を遂げないうちに、ダ行の破擦音化が起こりえたとする(亀井孝他「日本語の歴史」, 小倉肇1998参照)。

このような想定に基づく場合、上に述べてきた、破擦音化、「四つ仮名」合流に関する過程はどのようなになるであろうか。結論としては、この想定下においても、基本的な点が大きく左右されることはない。そのような過程であったとしても、ダ行のヂヅの側が摩擦要素を取り込む点に違いはないからである。違うとすれば、摩擦要素を取り込むことがそのまま合流を意味するという点である(ヂヅの破擦音化がそのまま合流を意味する)。しかしながら、実際には、ザ行の音声実現には、前鼻要素の問題や、撥音の問題が絡んでおり、そのように単純な変化過程ではなかつたろう(実際にはより複雑)と推定される(高山知明1993, 2002参照。ここでは詳しく論じることはできないが、当該筆者は、これらの論文で示した内容についても、現在、修正が必要である)。

2.13. セ, ゼとの関係

ここでは上記の論述に対して、以下の点を補足する。

キリシタン文献のローマ字綴りに基づけば、近畿中央方言のサ行セ, ザ行ゼは当時、次のようであったと推定されている。

sa	ʃi	su	ʃe	so
za	ʒi	zu	ʒe	zo

チ, ツ, チ, ツと同様に, タ行テ, ダ行デも, $te > tʃe$, $de > dʒe$ と変化してよさそうに思われるかもしれない。しかし, これは, タ, トが $tʃa$, $tʃo$ にならないのと同じく破擦音化の対象とならなかった。セは, 拗音 $/sja/ /sjo/ /sju/$ と同じようには, 音素的に $/sje/$ と (条件を付けずに) 解釈しうる関係を持たない (ぜも同)。破擦音化は, 子音の口蓋的非口蓋的だけで区別できるところに限られている。

2.14. 破擦音化の遅速の問題

チヂの破擦音化は, ツヅの破擦音化に対してその生起の時期が先行したと指摘されている。実際, 諸方言の中にも, 後者では破擦音化しない (あるいはそれが不完全である) 状態を示すものがある。結果として, ズヅにおいて合流に至らない, いわゆる三つ仮名弁 (柴田1987等) が存在する。その一方, ジヂが合一化しない「三つ仮名弁」は見出せない。

もし, 当時の破擦音化についても, そうであるとすれば, 本稿で行ってきた上記の議論にとっても, 無視できない問題を含んでいる。口蓋的対非口蓋的という対立が関わったとすればその時間差はどのように考えればよいのか, という点が課題となるからである。

ここでは, 想定される一つの道筋を示しておくことにする。

口蓋的対非口蓋的という関係は, 変化の最初期においてはその推進力の中心ではなかった。当初は, チヂにおいて, 口蓋化が契機となって破擦音への傾斜を顕著にさせていた。その結果として, チヂの破擦音化が一步先んじて進行した。しかし, 変化はそこだけにとどまらなかった。聞き取りにおける摩擦要素の有利さは, チヂだけでなくツヅにも当てはまる。前節に述べたように当時の日本語はそのような条件にある。そのため, ツヅも射程に入り, 非口蓋的な摩擦要素が発生し始めた。つまり, 途中の段階から, 口蓋的と非

口蓋的との差異が変化に関わるようになった。口蓋化に端を発した破擦音発生は、さらに、摩擦要素による口蓋的と非口蓋的の「対立」形成へと現象が変容した（あるいは、成長ないし発達を遂げた）と解釈される。

我々は言語変化を捉えるに当たり、例えば以下に示すような、変化の条件式にまとめることで満足しがちである。さらに言えば、このような抽象化を施すほうにむしろ力を注ぐ。同一の言語変化を示す場合に、その「変化」の最初から最後までを一つの、いわば統一的な秩序でもって括ろうとし、包括的な図式化にあてはめることに精力を注ぐ。「一般化」という観点からすれば、それはそれでももちろん意義のあることではある。

破裂・歯音 → 破擦・歯音 （狭母音の前）

このような抽象化は、（一個の現象と見なされる）変化の、その前後に相当すると見なされる、時期を隔てた二つの静態を比べ合わせ、そこに見られる違いを見出すことによって導き出される。その両静態のズレを一貫する法則でもって把握しようとするのを通例とする。

その抽象の結果、その間の具体的動きは捨象されることになる。しかし、切り捨てられる動的側面に価値がないとはいえない。そのような態度をもってしては、言語変化のたいへん重要な部分を捉えることはできない。それどころか、それを積極的に捨ててしまう。しかし、その部分は、言語変化というものがどのように進行するのか（さらに言えば、その進行の途上で、現象がどのように変容するのか）という問題に深く関わる。その意味からすると、上記の日本語の事例は貴重である。数百年前の音変化であるにもかかわらず、それなりに材料が存在し、それなりにその復元が可能であるからである。

「同一」の音変化（すなわちこの場合、破擦音化）と見なされるものであ

っても、その現象の性質が時間の経過とともに変わりうることを暗示してくれる。現象の最初から最後までを一つの、いわば統一的秩序でもって理解しようとする方向とは逆の視点もまたたいへん重要である。

我々が言語の史的現象をどのように見るべきかという一般的課題に対し、このことは興味深い示唆を与えてくれる。

2.15. 母音体系と破擦音化

ツヅの破擦音化は、母音/u/の中舌化によるとしたが、これは、そもそも/u/が日本語では円唇的傾向が弱いことと関わりがある。

円唇非円唇の特徴は、日本語の母音体系ではさほど重要な役割を演じておらず、結果として、/u/に先行する子音を唇音化することが顕著でない。五母音体系と一口にいても、たがいがどのように特徴づけられるかという点で様々なタイプがあるはずである。日本語では口蓋と非口蓋の差異に比べ、唇音と非唇音 (labial, non-labial) の差異はきわだたない。こうした母音との関係も、タ行ダ行の破擦音化を考える上で参照されるべき点である。

2.16. 破擦音化の類型論

一般的に言って、破擦音化がどのような場合に起こっているか、さまざまな言語における例を比べてみることも意義がある。本研究では研究計画上、その点に深く踏み込むものではない。しかし、今後、日本語以外の破擦音化に目を向けることは必要である。また、そうすることによって、日本語の事例が提起する課題もより鮮明になるだろう。

ここでは参考のために一例として、朝鮮語の場合を取り上げてみたい（ここでは、その言語史について述べる都合上、日本での習慣に従い、この呼称を用いる）。

朝鮮語の破擦音化

(1) (ㅍ, ㅌ) の音価 17, 18世紀以前 ts ts'

(破擦音素が既存)

(2) (ㅍ, ㅌ)が口蓋音に変化 tʃ tʃ'

これにより, /ca/ : /cja/等の対立が消失。

(3) (ㄷ, ㅌ)+i, j において破擦音化(「口蓋音化」として知られる)

これにより, /ti/ : /ci/等の対立が消失。/ti/等は音配列から姿を消す。

さらに/tii/などが/ti/に(例, 건디다は견디-からの変化)。

李基文(1972a,b) 参照

この場合, (1)(2)に示すように, 当初より, 体系内に破擦音素が存在しており, そのような中であって, (3)の現象が生じている。すなわち, 破裂音が, これに続く前舌母音および渡り音 j の口蓋化によって, 破擦音に変化している。これも, やはり, 口蓋化が重要な鍵を握っている事例である。なお, (3)は当該言語史では, 破擦音化というより, 口蓋音化の名で知られているようである。

ところで, 李基文(1972a, b)によれば, (1)の段階では s などについても口蓋化が著しくないため, /i/, /j/の前でも [ʃ]ではないと推定する(現代西北方言からの示唆を重視)。そして, これらも含めて(2)において, 口蓋音化する。しかし, ここで興味深いのは, s とは違って, 元々の破擦音素のほうは, 後続する母音およびわたり音の条件に左右されず, その全体が ts>tʃ などのように口蓋音に移行している点である。

もちろん, 言語一般に関して, 破擦音と摩擦音とが日本語の場合のように必ず並行的に現れるというものではない。いま上に見た朝鮮語に即し言えば,

(2)の段階で、その s (入) は、口蓋的、非口蓋的の音色の違いが後続母音の違いに応じて現れる点では日本語のサ行子音と同じである(i, jの前で[ʃ]となるが、それ以外では[s])。しかし、他方において tʃ, tʃʰ, tʃʷ (ス, ス, ス) はこれと並行的な関係を作るわけではない。すなわち、後続母音の如何に関わらず一貫して口蓋的な音色を持っており、他方、非口蓋的な[ts]([dz]), [tsʰ], [tsʷ]はそこが空隙となっていて現れることがない。また、同語の破擦音は音素としての確固たる位置を有している点でも日本語とは異なっている。

朝鮮語の音韻史においても、上に整理したように、その歴史的変遷においては、摩擦音と破擦音との間にある種の並行的関係が見出されるようだが、それは日本語とはまた異なる顕れ方をしている。諸言語の一般問題として、音韻体系内での摩擦音と破擦音との関係に関してはさらに興味深い点が少なからずあると思われるが、ここではこれ以上詳しく見ることはできない。

話を日本語に戻すと、チツヂヅの変化の特質は、既存の摩擦音サ行ザ行と相関関係を作る形で破擦音が生み出されたという点である。むろん、今後、さらにいろいろな事例に基づく考察が必要である。

2.17. 現代語における口蓋的対非口蓋的の「対立」

最後に、この破擦音化が現代語の音韻体系にどのように関わっているかについて触れることにする。ただし、紙幅の都合により概略にとどめる。

一般に、音韻体系を導くには、対象となる言語の音の総体を調べ上げ、その現れ方を過不足なく説明することが求められる。しかし、周知のように、その作業を進めていくと、分布の偏りや均斉を欠く点が内部に存在するために、分析の結果、解釈が一義的に定まらない場合が出てくる。いずれにせよ、伝統的な音韻論的解釈のやり方では、音素を一義的に抽出することが要求されるため、結果として導き出される音韻体系は各単位をいわば平面的に排列

したものとなる。

しかしながら、音韻体系そのものに多面性があるとすれば、異なる解釈を同時に許すような枠組みでこれを理解する必要がある。とりわけ、通時的な観点から音韻体系について考察する場合にはそのことが求められる。

今、口蓋的対非口蓋的という観点からは、現代語の破擦音(チ, ツ), サ行, ザ行の子音(すなわち、歯音でかつ摩擦要素を含む類)を次のように整理することも可能である。当座処理すべき問題をいたずらに増やさないためにタテト, ダデドはあえて省いてある。各音は、どのような語に出てくるか、その語数がどのくらいあるかといった点で相互に著しい不均衡があるが、以下はそれを問わない面から切り取った一つの姿である。tsに関しては「おとつあん」「ごつあん」「ごつおー(御馳走)」や外国の固有名に現れる「ツェッペリン」「ルツェルン」を念頭に置く⁸。

非口蓋的	sa	so	su	se	--
口蓋的	ʃa	ʃo	ʃu	ʃe	ʃi
非口蓋的	za	zo	zu	ze	--
口蓋的	ʒa	ʒo	ʒu	ʒe	ʒi
非口蓋的	tʃa	tʃo	tʃu	tʃe	(tʃi)?
口蓋的	tʃa	tʃo	tʃu	tʃe	tʃi

これら三者の ʃ, ʒ, tʃ (すなわち口蓋的な「単位」)に共通する分布上の特質は、後続母音が e のときにもそれが安定して現れることである(「チェス」「マ

⁸ 当該筆者は、三重県南部、伊勢地方の方言を母語に持つ。そこでは、「ごつおー(御馳走)」は日常よく使われ、また地名「松阪」は現地では「まっつあか」と呼ぶのが一般的である。ここでの対象は近畿中央方言であるが、近畿周辺の状況を知る手掛かりとして併せて記す。

ルシェ」「ジェラシー」などの外来語をはじめ、「ちえっ」のような周辺的なものも考慮される)。これとは対照的に、上記以外の子音ではキェ、ヒェ、ビェ、ニェなどいずれも安定せず、2モーラになることもめずらしくない。さらにイェも同じく安定的でない。例えば、「イエス・ノー・クイズ」の「イエス」は[ie]と二つの母音になりやすいし、「イエール大学」「イエールサレム」では単独の[e]となることもある。これらの子音とʃ, ʒ, tʃとのこの違いは単純な「あきま」による解釈ではうまく説明できない。

むしろ、シェ、ジェ、チェの三者を拗音の一種として処理することは、体系全体の見地から一定の合理性がありはするが、他方、ʃ, ʒ, tʃが i, e, a, o, u のすべての母音の前に分布することを考えるとそうした処理に解釈上の無理が全く伴わないわけではない。結局のところ、シャ、シュ、ショ；ジャ、ジュ、ジョ；チャ、チュ、チョは、他の行と同じく拗音の成員であるとともに、摩擦要素を持つ歯音類に属し、そこにおいて、口蓋的対非口蓋的の「対立」関係の、前者の成員として解釈しうる側面も同時に併せ持っている。

このとき、非口蓋的の子音は母音 i の前で口蓋的の子音と中和する (tsi の扱いに関しては、si, zi と同じような処理が可能かどうかの検討がさらに必要ではある)。

このような現代の状態に至るまでには、破擦音化以降、セ、ゼの変化がその過程でどのように関わったのかという問題が存在するし、また、外来語の大量流入といった外部的要因も加わっている。もちろん、これは破擦音化から一朝一夕に出来上がった体系ではない。しかしながら、現代語の口蓋的対非口蓋的の「対立」関係の萌芽は、タ行、ダ行の破擦音化を契機に形作られたものである。第7節で下位体系の創生と呼んだものがそれにあたる。

以上の論に対してはIPAの字母[ɲ][ʒ][tʃ]を弄した paper phonetics とする批判がなされるかもしれない。しかし、IPAの表に独立的な字母[ɲ][ʒ]が位置づけ

られていることは、本論の趣旨にまったく関わりを持たない。たとえそのような字母が存在しなくとも、以上の論旨が変わるところはない。

2.18. 破擦音化に関する課題

破擦音化に関する課題のうち、ここで詳しく論じなかった点を、上記で触れたものも含めて、最後に整理しておくことにする。

- (1) サ行、ザ行の音価の推移との関係。かつて、これらが破擦音で実現されていたと推定されることとの関係について（亀井論文，小倉論文参照）。
- (2) カ行のキ，ガ行のギの破擦音化（ki>tʃi, gi>dʒi）との関係（諸方言の中では実際に生じている）。なお，これと比べてみても，タ行ダ行の破擦音化が，両狭母音で生じている点がきわだっている。日本語の音韻史においては，kj と tj のせめぎ合いという観点から，破擦音化の問題を探ってみることも必要かもしれない。
- (3) 琉球諸方言をのぞいたとしても，諸方言で，タ行ダ行について破擦音化がほぼ同様の過程で生じたのかについては，慎重に構える必要がある。有坂が指摘する上代東国語の破擦音は，後代の破擦音化と異なっている。近畿を中心とする変化という範囲でしか，当面，明らかにできないところに大きな限界がある。
- (4) 子音と母音との関係性の観点から見て，破擦音化より遅れて発生したハ行子音の脱唇音化（delabialisation）も興味深い。ハ行子音は，現在，無声化母音であるといわれる。実際，その後，ハ行子音は歯茎とか唇といったような，一定の調音場所によって特徴づけることができなくなっている（声門摩擦とするのは現実的でない）。破擦音化とは軸足の移し方が異なっているが，子音と母音とを組み合わせた音節全体の区別という観点から捉えるとより理解できる点で共通の問題を提起する。

参考文献

- 李 基 文1972a『國語音韻史研究』（1977國語學叢書 3 [國語學會]による，韓国） 8.口蓋音化.
- 李 基 文1972b『國語史概説 改訂版』（韓国，塔出版社）第八章 「近代語音韻」ほか（藤本幸夫訳『韓国語の歴史』大修館書店）.
- 小倉 肇1998「サ行子音の歴史」『國語學』第195集.
- 亀井 孝他2007『日本語の歴史 5 近代語の流れ』第1章. 平凡社.
- 柴田 武1978『方言の世界』「現代方言の源流」平凡社.
- 杉村孝夫2001「九州方言の四つ仮名」『音声研究』第5巻第3号.
- 高山知明1993「破擦音と摩擦音の合流と濁子音の変化—いわゆる「四つ仮名」合流の歴史的な位置付け—」『国語国文』第62巻第4号.
- 高山知明2002「耳障りになったザ行音」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』第21集. 和泉書院.
- 高山知明2006「破擦音化と母音体系」『実験音声学と一般言語学—城生佰太郎博士還暦記念論文集—』東京堂.
- 中本正智1990『日本列島言語史の研究』第3章第3節「タ行音の構造的推移」大修館書店.
- 服部四郎1960『言語学の方法』岩波書店.

3. 日本語における前鼻子音の概念規定について

本章では、次章で問題とする「前鼻子音」の概念規定について述べる。

中世から江戸期にかけて、前鼻子音 *prenasalized consonants* で実現されていた母音間の濁子音が、その鼻音要素を弱めていったと言われている（橋本進吉「国語に於ける鼻母音」⁹参照）。しかし、その微弱化を裏付ける具体的証拠が十分に示されているわけではない。音韻史の課題としては、文献資料に基づいて、これをよりの確に示す必要が残されている。また、その微弱化の過程でどのような事態が発生していたのかという、より詳細な局面に対しても光が当てられていない。既発表論文を通して論じたように（次章参考文献参照）、その点を文献から読み取ることは可能である。

シンハラ語のように、有声子音のうちの前鼻音と非前鼻音とが区別され、それらが子音体系の中で互いに異なる系列を成す言語もあるが（Ladefoged & Maddieson, 1996¹⁰などを参照）、中世の日本語における両音は、語頭と非語頭（非語頭の場合は事実上、母音間と見てよい）といった、出現位置の違いによる異音の関係にあった¹¹。しかも、前鼻子音の鼻音要素の現れ方は、『ロドリゲス大文典』『ロドリゲス小文典』の記事からも知られるように、ガ行、ザ行、ダ行、バ行の違いによっても差があって一様でなかったようである。つまり、子音の調音点によって鼻音要素の強弱が違っていた（ガ行では鼻音 [ŋ] も一異音であったと推定されている。亀井孝「ガ行のかな」¹²参照）。

⁹ 橋本進吉著作集『国語音韻の研究』（岩波書店）所収。

¹⁰ *The Sounds of the World's Languages*, Blackwell.

¹¹ 東京方言のガ行音のように、形態の境界に絡んで、「十五夜」の[ŋ]と「十五」の[g]のような対が、前鼻子音と非前鼻子音との間に存在する可能性を排除するものではない。

¹² 亀井孝論文集『日本語のすがたところ（一）』（吉川弘文館）所収。

ところで、前鼻子音と非前鼻子音の音声の違いは必ずしも截然としたものではなく、多分に連続的であり、その間には中間的な実現がいくらかも存在する。つまり、両音はこうした連続帯の両極にあるとあってよい。中世の日本語では、前鼻子音と非前鼻子音とが位置異音の関係にあり、さらに、その前鼻子音の、鼻音要素の現れ方の程度についても調音点によるばらつきがある。この二つの面を総合すると、当時の濁子音の諸変異は、両音の連続帯に広く亘って分散していると言ってよいだろう。そして、そこに生じた歴史的な鼻音要素の弱化は、その諸変異の分散領域が、この連続帯上の、全体として非前鼻の側に分散の中心場所を移していく過程とすることができる。しかし、同時に、この弱化を経た今日においても、濁子音の分散領域は、なおも両音の連続帯にあるのかもしれない。

しかしながら、今述べた濁子音の様相を遺憾なく言い表すことは不可能に近い。既存の用語を用いて、すべての側面を余すことなく満足のいくかたちで表現することにはおのずから限界がある。

それゆえ、用語の使用においては、指し示す対象が不明確にならないよう配慮しつつ、現象の切り取り方、問題の設定の仕方に応じて、弾力的に線引きを施すしかない。実際、音声学では、個々の音声（単音）を指す用語を、論の内容に応じて柔軟に使い分ける習慣が存在している。よく知られているように、「無声破裂歯音」[t]を例にとると、日本語のそれについて論じる時、無気と有気の違いが問題にならない限りは、そのいずれであるかは問わず、その差異に抽象化を施して、一つの音声と見なして取り扱う。他方、語頭とそれ以外での音声の違いなど、有気と無気の違いが問題になる場合には、その差異を用語上にも示し、無声破裂歯音に二種の音声があるという表し方に切り替える（これに連動してIPAの[t]が表す意味も変わる。後者では「無気」という意味で使われる）。このように、論じる内容に応じて、用語が示す

中身の設定を弾力的に替える必要が出てくる。しばしば、音声学の単位といえども音韻論の観点を取り入れて抽象化する必要があると言われるが、実際には、音韻論的対立に直接関与しない音声の差違に関しても、必要に応じて弾力的な用語の使用が必要とされることが少なくない。

ここでの用語の運用も、基本的には上に述べたのと同じく弾力的なやり方に従わざるをえない。具体的にはさらに次のような用語の規定が問題になる。すなわち、有声の「前鼻子音」と、これに対する有声の「口子音」の規定上の問題に反省を加えておかなければならない。

「有声口子音」と一口にいっても、その具体的内容は、いわゆる有声有気（つぶやき音）も含めば、複数の音声を包括しうる概念・用語である。しかし、その違いを問う必要がなければ、これらをおしなべて単に「有声」として認め、それ以上の違いには言及せずに済ませる。このように、抽象化が施された一個の音声学上の特徴「有声」には、それ自体の中に種々の異なる音声が包括されうる。その「有声」の中に、鼻音要素の先行によって、閉鎖時に声門下圧に対する上圧を低下させ、呼気の流れを作って声帯を振動させる実現を含めることも拒むものではない。これを前鼻子音として別に立てるか、それとも、「有声」の中に一つに含めてしまうか、あるいは、その鼻音要素の程度に応じて定義を行うか、といった判断は個々の論の目的に応じて下さざるを得ない。要は、矛盾の生じないように配慮しつつ、用語の規定を適切に行うことである。例えば、前鼻子音か否かの違いが問題にならなければ、中世の日本語も現代語も同じく濁子音を「有声口子音」として等しく取り扱うことも可能であるし、実際、そうして済ませることのできる場合もある。

結局のところ、本研究で取り扱う問題に関しては、鼻音要素の量(quantity)の多寡、つまりその持続時間が長いか否かの違いも含めて、「鼻音要素の有無」として抽象化せざるをえない。本研究では、鼻音要素が弱まり、それが消失

する方向に変わっている面が重要な意味を持つ。そのため、鼻音要素があるか、それともそれを完全に欠くかといった厳密な差異に拘ると、行論上、煩雑になることが避けられなくなる。そこで、鼻音要素を顕著に持つ音声を「前鼻子音」と規定し、鼻音要素を欠くか、もしくはそれが微弱な音声を、「非前鼻子音」あるいは「鼻音要素を持たない口子音」（便宜的に単に「口子音」と規定する。こうした抽象化は、事実関係に矛盾が生じない限り方法論的に見て正当であり、また不可欠な処置でもある。

例えば、現代語のダ行子音を「口子音」と呼ぶことについても、それが中世の前鼻子音に対し、相対的に口子音の側に寄った音声実現であるという意味においてであれば、当面する問題を論じる上では許されよう。

なお、前鼻子音であるとされる中世京都方言においてすでに、現実の、個々の実現においては、鼻音要素がきわめて微弱な音声があったことも十分に考えられる。しかし、中世京都方言ではダ行子音は母音間で「前鼻子音」であったと認定するとしても、それによって、当時の現実の音声のすべてが画定されるものではない。この面においても我々は一種の抽象化を施しているわけであるが、これは、上に述べた抽象化とはまた次元を異にする面における処置である。

4. 個別言語の音韻史が持つ意義（梗概）

4.1. はじめに

日本語という個別言語の音韻史の意義がどのようなところにあるのか，本研究課題で扱った具体的な問題を通して提示する。以下はその梗概である。

4.2. 言語変化に対する二つの接近の仕方

ある言語のある言語変化(特にここでは音変化)は一回性の出来事であるが，それに対してどのようなアプローチがあるかを大きく二つに分けると次のようである。

(1) 一般理論的関心

言語の一般性，普遍性に対する関心から，特定の歴史的出来事に目を向けるやりかたである。それによって導かれるのは，そうした個々の変化の事例から知られることを，一般理論へ還元することである。さらに他の変化の例も含めて，普遍的性質に関する知見を追究する。そのために，当該の歴史的出来事に対して，必要な抽象化を施すことが多い。細部にわたる歴史的な文脈は必ずしも重要なものではない。

(2) 個別言語史的関心

当該の歴史的出来事を可能な限りもれなく再現する。とくに，その事象を取り巻く歴史的な文脈を明らかにする。歴史的な文脈と一口にいても，音変化の場合であれば，音に関する問題のみならず，形態論，文法論などのような他の言語的側面，さらには社会的な状況（つまり社会言語学的な問題）をも含めた広い意味での時間的「文脈」を指す。要するに，「事件」としての経緯を明らかにし，その背景を探る。それは，必ずしも，言語の一般的傾向，普遍性の反映という側面に限られない。

このうちの(2)の接近によって得られるのは、歴史的事象が本来的に持つ動的性質を具体的な個々の事件のありようを通して窺い知ることである。一般理論への還元にこだわることなく、個別的な事象そのものを追うこと自体に意義を有する。とくに重要な問題となりうるのは、言語変化の「現象としての複雑性」であろう。

4.3. 言語変化の複雑性

ここでは、「言語変化の複雑性」に関してより具体的に次の二つの問題を取り上げる。

(A) 「時間の流れに沿って変容する現象」としての言語変化

(B) 「たがいに異なる変化どうしの相互干渉」

この二つの主題を以下の歴史的出来事をもとに論じる。

(A) の主題：タ行，ダ行の破擦音化

(B) の主題：四つ仮名合流と，濁音の脱前鼻音化

比較的文献資料に恵まれ、また、現代諸方言の状況の中にも過去の歴史をうかがい知る材料が存在している。その意味で研究上有利な条件にあると言える。ここでは、15世紀から17世紀の京都を中心とする方言を対象にして考える。なお、(A)の主題に関しては、第2章においても部分的に触れている。

4.4. 「変容する現象」としてのタ行・ダ行破擦音化

タ行ダ行の破擦音化は、次のように、異なる二つの狭母音/i//u/を持つ音節において発生した。

- /チ/ ti > tʃi, /ヂ/ di > dʒi
- /ツ/ tu > tsu, /ヅ/ du > dzu

(ここでは、拗音は/i/に準ずるものとし、省略する)

しかし、第2章でも述べたとおり、それぞれに関して、その音声条件を異にしている。

- /i/の前：口蓋化による摩擦要素の発生・定着 類例 ki > tʃi
- /u/の前：中舌化による摩擦要素の発生・定着 (これに関しては、朝鮮資料 (『倭語類解』『改修捷解新語』) に見られる、ス、ツ、ズ (ヅ) の母音に関する文献上の事実 (ハングルの字母の選択) が重要な手掛かりを提供する)。

さらに、問題点として次のことが挙げられる。

(I) /i/の前での破擦音化が、/u/の前での破擦音化に先行したらしい。これは文献、方言の状況から窺える。

(II) 音声条件の異なる二つの「変化」が、なぜほぼ同時期に発生したか。

この点に対する考察が必要である。とくに後者の問題 (II) に関しては、第2章に詳しく述べたとおり、口蓋的対非口蓋的の「対立」関係が、余剰的特徴とはいえ重要な役割を変化の過程で演じたためであると考えられる。ここではこれ以上繰り返さない。肝心な点は、これと前者の問題 (I) とのかかわりである。これについても同様に第2章で触れているが、ここでは特にその点に

注目する。

この変化は、その初期の段階から、口蓋的対非口蓋的の「対立」関係が変化を推し進めたわけではなく、この関係は変化の中途から関わるようになった。当初は、口蓋化に端を発するチ、ヂの前での破擦音化として現象がはじまり、それが拡大していったと考えられる。それが時間差となって現われたものと解釈される。

そもそも「現象」というものは、しばしば時間の流れに沿って展開する中で、その性質を変えることがある。言語変化もその意味において例外ではない。その点を抽象化してしまつては、言語変化に対する理解に必ずしもつながらない。この破擦音化にはそのような変容を見ることができるのではないだろうか。その変容を、順を追って整理すると次のようになる。

- /チ//ヂ/の破擦音化 (←口蓋化)
- ↓
- 「口蓋的：非口蓋的」の関係が関わる方向に現象が変容 (破擦音化の時間差)
- ↓
- /ツ//ヅ/の破擦音化 (非口蓋の位置に←中舌化)
- ↓
- 摩擦的噪音による口蓋的：非口蓋的の識別 (下位体系の形成)

「一個」の変化の複雑性という観点から、以上をまとめると次のようになる。

- 変化の条件、道筋は当初から一貫して、決まっているとは限らない。現象は、時間的流れに沿って、その性質を変えていく。
- 時間軸に沿って現象が変容するのは様々な現象においてしばしば見られる性質であり、言語変化 (とりわけ音変化) もその一つである。

- ・ こうした点は、形態の変化、文法辞の形成過程においても指摘できると思われる。

4.5. 異なる変化の相互干渉：「四つ仮名合流」と「濁音の脱前鼻音化」

たがいに異なる変化が、たまたま同じような時期に発生した二つの変化がある。その意味で本来的には関係のない変化が、時期を同じくすることによって相互に干渉したと考えられる。こうしたことも、個別言語史の視点から「歴史的出来事」を扱う中で光を当てることができる主題である。

4.5.1. 濁音の脱前鼻音化

脱前鼻音化の傾向が現れる以前の、濁音（母音間）の推定音価

バ行	ダ行	ザ行	ガ行
^m b	ⁿ d	ⁿ dz	ⁿ g(ŋ)

4.5.2. 第一の干渉

バ行、ザ行で脱前鼻音化の傾向が現れる

バ行	ダ行	ザ行	ガ行
^m b	ⁿ d	ⁿ dz	ⁿ g(ŋ)
↓	↓	↓	
	ⁿ d, ⁿ dz	z	

根拠となる文献

- ・『ロドリゲス（大，小）文典』（17世紀初期）
- ・契沖『和字正濫鈔』（1695年刊）：「ぢとづとはあたりて鼻に入るやうにいはずればかなはず」（「常にいふ」とするのは「じ」「ず」）
- ・『以敬齋口語聞書』

『ロドリゲス文典』と、時代が下って記された『和字』『以敬齋』と、異なる時代の異なる文献の間で、内容に整合性が見られることから、この推定は間違いがないと考えられる。

ザ行が、ダ行に先んじて脱前鼻音化の傾向を示すとともに、同時に摩擦音に傾斜することによって、一時的に、四つ仮名の区別が維持される方向に働いた(合流の流れを一旦食い止める「第一の干渉」)。この段階の区別の仕方が、世代間で規範として伝えられたのが、『和字』や『以敬齋』が説く発音法であろう(遠藤邦基2002参照)。

4.5.3. 第二の干渉

脱前鼻音化の完了(『以敬齋口語聞書』の記事内容から確認される。高山知明1998参照)。その段階の濁音の状態は次のように推定される(ただし、以下はガ行にも非鼻音化が起こっている場合。実際にはガ行の非鼻音化は遅れる)。

	バ行	ダ行	ザ行	ガ行
破裂・破擦	b	d	dz	g (ŋ)
	:		:	:
摩擦	β		z	ɣ

非前鼻化が進むと、全体的に摩擦音が現れるようになる(現代語の状態に近づく)。

「第一の干渉」によって一時的に保たれていた四つ仮名の区別は、脱前鼻音化がさらに進行すると、濁音全体(ただし/da//de//do/を除く)が上のようなバリエーションの出現の仕方に移行したため、そのバリエーションの中に吸収された。つまり、最終段階では、そのような方向づけをもって合流の完了をむかえた。これが、第二の干渉である。第二の干渉と第一の干渉とは、

四つ仮名合流の側から見れば、もたらされる結果が逆に働いているように見える。

二つの相異なる変化がこのように干渉するという経緯は、個々の現象だけを取り上げると見過ごされやすい。しかし、個別言語史の面白さは、こうした歴史的な脈を探るところにあるのではないか。また、これは個別言語史の立場であってこそ掘り下げることができる言語変化の動的局面である。

4.6. 撥音の次にくるザ行音

これについては、高山知明（2002, 2005等）で述べた問題であるが、やはり、上に述べた二つの変化の相互干渉の結果生じた事態である。

以下のように、ザ行が全体的に非前鼻音化・摩擦化の方向に変化する中で（この動きについては上に述べたとおり）、撥音の後のザ行は、依然として破裂音で実現されるのがより一般的であったのではないかと推定される。

ザ行	撥音＋ザ行
^h dz	Ndz
↓	↓
z	Ndz

前鼻音の脱前鼻音化は、他方において、その鼻音要素を濁音から独立した特徴として聴き取る話者の出現をもたらした。結果として、撥音の一種として聞くことになった。

他方において、四つ仮名の区別の規範は、前鼻音と破裂の有無によって守られるとする規範が存在している、という状況がある。

そのような状況下で、撥音に続くザ行音を正しくないものとして聴き取る

感覚が発生した。いわば、その意味で過剰訂正の一種ということができる。

具体的な材料は以下のとおり。

『当流謡百番仮名遣開合』（一六
九七年刊）

謡曲中の語句について、発音上注
意すべき点を記し、列挙。

- ・「藤 ふちと ちの字つめる」
- ・「悪事 あくしとしの字和に」
- ・「是非 せの字和に」
- ・「馳参し さんとはねる下のし
いといふ心に」
- ・「観世 くわんとはねる下の
にこるせは ゑと云」
- ・「天上 てんしやうとはねる下
のし和に」

『音曲玉淵集』（一七二七年
刊）

・げんじの唱へ はね字の舌
をひかへさせんために傍
にイ文字を付るを直にげい
じとよむことイカゝ

・又曰築シ地 如此傍ニシ字ヲ
付るは いノかなヨリちノ
字にうつればじノかなニ

さらに、『蜷縮涼鼓集』の著者が説く撥音に関する以下の認識の背景にも、上
に述べた二つの変化の相互の干渉が存在する。

刊 『蜆縮涼鼓集』 (一六九五年)

じぢずづを区別は、上顎に付けるか付けないかの違いのみに心がけよと説く。

- ・ 「天上といふがごとき天とはぬる時に心を付て舌頭を中に置て(是 齒音のよびかた也) てい と云様に呼受て上(じやう)の音に続くれば齒音に移るに障りなし」
- ・ 「最上といふ時は始より舌を中に置て さい とよぶ故に齒音の移り宜しき也」

じぢずづを区別は、上顎に付けるか付けないかの違いのみに心がけよと説く。

母音間↓ジズ之音になる
撥音の後↓ヂヅ之音になる

以上をまとめると次のようになる。

- ・ 前鼻音の有無が破裂の有無と併せて、一時的に/ジ/と/ヂ/, /ズ/と/ヅ/の区別を担った。
- ・ 前鼻音が消失するにつれて、その鼻音要素は、撥音(もしくはそれに類似の音)と認識されるようになった。
- ・ 撥音の後に特に注意が向くようになり、もともと撥音の後では破擦音であったザ行音が「耳障り」に感じられるようになった。その結果、過剰に撥音の鼻音を弱める発音法が説かれるようになった(hyper

correction)。

4.7. まとめ

以上、第4章で述べてきたことを最後にまとめておく。

個別言語史の視点は、言語変化の歴史的な脈を重視して、そこから言語変化の動的側面を描き出すところに大きな意義がある。ここでは、言語変化の複雑性という観点から、この問題を論じた。主に取り扱った主題は次の二つである。

(A) 「一つの変化」と見なされている現象が持つ複雑性（時間の流れに沿って変容すること）について見た。具体的には、タ行ダ行の破擦音化を取り上げた。

(B) 異なる複数の変化が、歴史的な脈の中で絡み合うことがある。これを正面から取り扱うことができるのは個別言語史である。そうした異なる変化の相互干渉を、大きく分けて二つの事象を通して見てきた。

(I) 「四つ仮名」合流と前鼻音の消失は次の二段階で干渉：

(1) 一時的に「四つ仮名」区別を維持。

(2) 合流後の結果は、濁音全体のバリエーションの現れ方の一部となる。

(II) 前鼻音の消失傾向に伴ってその鼻音要素は撥音との間に「混同」を生じた。そのことが、話者の中に、四つ仮名のみならず、ザ行子音に対する意識を発生させた（過剰訂正）。

参考文献

- 遠藤邦基（2002）『読み癖注記の国語史研究』（清文堂）。
- 小倉肇（1998）サ行子音の歴史、『国語学』195。
- 亀井孝（1950）蜷縮涼鼓集を中心に見る四つがな，亀井孝論文集『日本語のすがたところ（一）』（吉川弘文館）所収。
- 亀井孝他（1964）『日本語の歴史5』平凡社（2007年，平凡社ライブラリー復刊）。
- 高山知明（1998）十七世紀末の前鼻音の実態について—『以敬齋口語聞書』『和字正濫鈔』の再検証—，『香川大学国文研究』23。
- 高山知明（2002）耳障りになったザ行音，『国語語彙史の研究』21。
- 高山知明（2005）文献資料から音変化の動因を探る，『日本學研究』16（檀國大學校日本研究所，韓国）。
- 高山知明（公表予定）タ行ダ行破擦音化の音韻的特質。
- 高山倫明（2006）四つ仮名と前鼻音，『筑紫語学論叢Ⅱ』（風間書房）
- 橋本進吉（1932）國語に於ける鼻母音，橋本進吉著作集『国語音韻の研究』（岩波書店）所収。